



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	シカゴ・フィールド博物館所蔵のアイヌ工芸品 : 1904年セントルイス博覧会と二つのテクンペ
Author(s)	宮武, 公夫
Citation	北方人文研究, 1, 41-54
Issue Date	2008-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34539
Type	departmental bulletin paper
File Information	MIYATAKE.pdf



シカゴ・フィールド博物館所蔵のアイヌ工芸品

— 1904 年セントルイス博覧会と二つのテクンペ —

宮 武 公 夫

北海道大学文学研究科

1 はじめに

1904 年 4 月 30 日から 12 月 1 日までの約 7 ヶ月間、当時全米で第 4 位の大都市であり、シカゴと並ぶ中心都市であったセントルイスで、ルイジアナ割譲記念国際博覧会 (Louisiana Purchase International Exposition) が開催された。この博覧会では、約 12000 エーカーの広大な敷地に、21 カ国の展示館のほか、教育、芸術、科学などの「文明」に関する展示館や、農業、工業、漁業などの「自然」に関する展示館が並び、世界中から 2000 万人近くの観客を集めた。そして、米西戦争や日清戦争の直後に行われたセントルイス博覧会は、新興帝国主義国家がその成果を世界に示すという、歴史的意味を持っていた。日本にとってのセントルイス博覧会は、初期の啓蒙的な学習の場としての博覧会ではなく、文明的な国民国家の実態を世界に誇示する絶好の機会であり、日本政府は 1900 年のパリ万博に次ぐ 80 万円もの予算を計上し、日露戦争下にもかかわらず開会式までに準備をすべて整えた唯一の国として、その参加努力は際立っていた。(HOTTA-LISTER 1999, 伊藤 2003, HARRIS 1975)¹⁾ このように、近代国家へ変容しつつあった日本と国際社会を結び付けようとする博覧会に、男性 4 名、女性 3 名、女兒 2 名の計 9 名のアイヌの人々と、チセをはじめとする生活や儀礼のための資材が、宣教師パチェラーの協力を受けたシカゴ大学の人類学者スターによって、北海道からセントルイスに運ばれた。(パチラー 1928, パチェラー 1965, STARR 1904) セントルイスに着いた 9 名のアイヌの人々は、4 月 6 日から 12 月はじめまでの約 8 ヶ月間のほとんどを、白老で購入され会場に移設された二棟のチセで生活することになる。

しかし、セントルイス博覧会の時代は、世界各地の多様な人々や社会を、「未開」から「文明」への過程として説明しようとする進化論の全盛期だった。このような背景から、博覧会における「人類学展示」は植民地主義のまなざしにより生み出されたのであり、そこでは、「植民地的な視線に適合するような『人種』の『劣等性』が、眼前の民族学的『実物展示』により『発見』されていく」のだとされる。(吉見 1992: 186) このような研究の中で多くの批判の対象となってきた博覧会の一つが、この 1904 年のセントルイス博覧会である (RYDELL 1984, 1992, 吉見 1992, BRET BART

1) 日本が大規模な展示を行った一方で、日露戦争のために、ロシアはセントルイス博覧会への参加を中止している。

1997, FERMIN 2004, PAREZO & FOWLER 2007)。これらの指摘のように、人類学展示の目的が異質な先住民の展示を通して、西洋や文明の優秀性を際立たせることにあったことは間違いない。(TAKADA 1992)しかし、多くの資料に見られるように、科学と文明の中心都市に移動したアイヌの人々は、8ヶ月間もの長期間滞在して生活し、さまざまな人々との多様な異文化接触を始めて経験した、当時としては極めてまれな存在だったといえるだろう。そして人類学展示のはらんでいた問題にもかかわらず、アイヌの人々は、日常のレベルでは一方的なまなざしの対象とされていたのではなく、また排除されていたのではなく、米国人、他の先住民、和人などの間を頻繁に横断し、そこではさまざまな交流を行っていた。(宮武 2002, 2006)それらのアイヌの人々は、強大な権力によって企画された人類学展示の中で展示された存在であったとともに、さまざまな日常実践を行った人々でもあった。ここでの実践とは、人々が制度や慣習といった社会構造に規定されながらも、能動的に社会と関わって行う自覚的決断や反省的思考をともなった身体的あるいは言語的行為である。それは、ブルデューのハビトゥスのように既存の社会構造を再生産するだけでなく、時にはそれらを塗り替える可能性をもった、社会的世界と個人的経験のあいだで行われる創造的な営みを意味している。(SHATZKI, KNORR CETINA & SAVIGNY 2001, 田辺 2002, 2003)アイヌの人々は、博覧会という巨大な装置の中で、その自由を制限されながらも、さまざまな境界を越えて自在に移動し、多くの人々との多義的で複雑な接触体験をとおして、多くの可能性を生み出したキメラのような多彩な貌をもつエージェントでもあった。20世紀初頭に行われた博覧会という時空間には、そのような日常実践により生み出された、「近代」の枠組みや概念によっては包摂しきれない、未分化で豊かな可能性に満ちた部分が多く含まれている。そのような博覧会を、西洋と非西洋、未開と文明、支配と被支配という二分法からのみ演繹的に理解しようとするのは、後に述べるように、過去の人々の生を奪う危険をはらんでいると共に、「近代」が生み出した虚構を演繹的に語ることでしかない。(LATOUR 1993, 宮武 2000)本稿は、このようなセントルイス博覧会におけるアイヌの人々の実践により生まれたと考えられる、シカゴ・フィールド博物館所蔵の二つのテクンペ(手甲)について考察したものである。

2 人類学における歴史研究と非文字史料

英国の社会人類学を中心とする、1920年代以降の人類学を支配した機能構造主義研究においては、変化のほとんど無い「冷たい社会」における共時的な「民族誌的現在」を描く民族誌が数多く生み出された。その一方で、人類学が対象にしてきた、文字資料がほとんど残されていない社会における歴史研究は、かつての進化論的人類学研究への反省から、「推測」に頼らざるをえないとして否定的に捉えられてきた。エヴァンス=プリチャードは1950年のマレット講演で、「機能主義人類学者は、推測による歴史という産湯とともに、根拠のある歴史という赤子まで流してしまった」と語っている。(EVANS=PRITCHARD 1963: 21)

しかし、コーンが『歴史学者のあいだの人類学者と他のエッセイ』で述べるように、歴史と人類学は「他者」研究を行う点では同じ目的を持っているといえるだろう。前者は時間的に遠く離れた「他者」を対象にして、文書(archive)を通して「他者」を理解しようとし、後者は空間的に遠く離れた「他者」を対象にして、フィールドワークによって「他者」を理解しようとする。それらは、時間と空間における他者性を、テキストとコンテキストにおいて翻訳しようとする点では同様の営みなのである。(COHN 1987: 18-49)そして人類学においては、1980年代以降のポスト・コロニア

リズム研究を契機として、歴史的な文脈を無視しては、多くの社会や文化の現在を理解できないことが明らかになり、社会変化や歴史に対する関心が高まってゆく。(THOMAS 1991, 春日 2004) しかし、そこには支配者によって作られた公式の歴史や統計、あるいは宗主国に残された新聞・雑誌などをのぞけば、限られた文字史料しか残されていないため、文字史料による歴史研究は大きな限界を持っている。では、豊富な文字史料をもとに歴史研究を行うことが可能な歴史家と異なり、無文字社会や、文字史料のほとんど残されていない先住民の歴史を人類学が研究するためには、どのようなアプローチが可能だろうか。

川田順造は『無文字社会の歴史』のなかで、人類の歴史の中では文字を用いなかった社会の方が遥かに多いのであり、文書研究による歴史学の手法を無文字社会にそのまま適用し、文字によらない歴史を文字社会の「辺境」としてしまわずに、文字による歴史を、文字によらない歴史の特殊な発展形態のひとつとして位置づけるべきだとする。そして、文字史料と非文字史料の一般的性格について次のように述べる。

非文字史料は、遺物や遺跡などモノとして形象化され固定されたものと、口承伝承や楽器の音、儀礼などのように形象化されず、生きた人間によって受けつがれるものに分けられる。そして、前者が土器の破片のように、過去のある時代の証拠としての性質を持つものに対して、後者は現在の語り手によって集約され、再解釈される歴史という性格を持つ。形象化され固定されたモノの研究者は、土器の破片を組み立てることで資料相互の関係を再構築して解釈するのに対して、口承伝承の研究者の場合には、伝承者により既に解釈された「解釈」を一旦壊して再解釈するというように、再度過去の破片を組み立てることになる。しかしこの対比も絶対的なものではない。文字による史料を、形象化された土器のようなモノの史料と、王の系譜語りのような口承の史料の中間においてみれば、文字史料が解釈の対象であるように、土器の破片もまた解釈を排除したものではなく、その形態や図像、文様そのものが解釈の対象となっていることは明らかだろう。モノ、文字、口承による歴史史料の違いは、それらの解釈の柔軟性の程度によるもので、異なった性格を持つものの連続したものとして理解すべきなのだ。このように、文字史料と非文字史料は、はっきりと区別された別の領域として存在するのではなく、文化人類学は歴史研究における『「無文字性」の側面——それは現代の文字社会にも存在する——を探究することに、特色を発揮できるといえるかもしれない』のである。(川田 2001)

3 非文字史料としての写真研究

ピーター・パークによれば、歴史の分野で絵画や写真などの非文字資料を証拠として用いることは、1930年代にブラジルの社会学的歴史学者であるフレイルによってもたらされた。また、アリエスの子供と死の歴史研究において、「視覚イメージは『古文書の資料や文書』と同じ資格を持った『感性和生活の根拠』として扱われている」が、視覚資料を証拠として扱う流れは1980年代に転回点を迎える。そして、写本、建築、家具、風景だけでなく、絵画、彫像、版画、写真などの視覚イメージが、証拠として認めうる過去の「痕跡」として用いられるようになる。(パーク 2007: 13-15)

このような非文字史料としての写真への関心は、人類学においても高まってゆく。エドワーズの『人類学と写真: 1860-1920』によれば、人類学における歴史への関心の高まりと同期して、文字史料が少ない先住民の歴史研究において、人類学者などが残した初期の写真資料が、歴史学における文書と同じように、形象化された非文字史料として第一級の重要な過去の史料であると考えられる

ようになる。日本で1980年代後半に行われた、鳥居龍蔵の台湾、朝鮮を初めとする写真資料の再評価と保存への努力も、このような人類学の歴史への転回と非文字史料としての写真への関心を背景にして行われたものだろう。(東京大学総合研究資料館 1991)

しかし、20世紀末期になると、写真は「真実」をあるがままに映し出す絶対的な「証拠」として認識されるのではなく、大衆的なコミュニケーションと消費の対象として相対化されてゆく。このことは同時に、人類学写真が特別な価値を持つ真正な民族資料としてではなく、広範な文化的表象において用いられるメディアのひとつとして理解されることを意味していた。そして、『文化を書く』に代表される批判的人类学における民族誌の再検討がひろがるのと同様に、人類学写真が撮影された歴史的・社会的背景や、撮影者の意図や背景、あるいは被写体との位置や権力関係が再検討されるようになる。(EDWARDS 1992; 4-5) それは、研究対象としてきた当該社会の文化と歴史の真正性を再検討し、学問そのものの在り方を問い直す研究が、人類学において盛んに行われるようになってゆくと同じように、写真そのものの真正性の再検討と権力性に関する詳細で具体的な研究が進められてゆく事を意味していた。このように、現在我々が目にすることの出来る、写真に固定された「他者」とは、対象をあるがままに映し出した唯一の真正な鏡像ではないとされる。それは、職業や立場の異なるさまざまな撮影者が、それぞれの乾板やフィルムの上に切り取った、異なった姿をもつ「他者」のひとつでしかない。また同時に、専門家としての科学者や人類学者だけでなく、さまざまな背景をもつ鑑賞者や消費者が、あるいは被写体となった人々自身が、異なった解釈と分類と定義を行う対象としての「他者」のひとつの姿でもあるのだ。しかしこのように複雑な関係を無視して、写真という非文字史料について、「視覚イメージには『時代精神』が表現されている」とか、「各時代にそれぞれの文化が均質に広がっていた」と理解することは、「あまりにも狭量」で、「あまりにも漠然としているという欠点を持っている」といえるだろう。(バーク 2007: 54-55)

4 構築主義と先住民の歴史

このように写真をはじめとする形象化された視覚イメージに関しては、過去の出来事の忠実な反映であるとする素朴な実在論や反映論だけでなく、過去の「時代精神」や文化がそのまま反映しているという図像学的解釈を含めて批判されるようになる。そして、1970年代後半からの、人類学を初めとする社会科学での言語論的・解釈学的転回以降には(GEERTZ 1973, RABINOW & SULLIVAN 1979)、視覚イメージや文字によるテキストとしての資料は、現在における解釈や記述の対象として相対化され、それらの資料による「歴史的事実」として考えられてきた出来事も、言語を用いて語られ表象されることによって「真実」として構築されたのだという構築主義的な主張が行われるようになる。このような構築主義的歴史観を代表する一人であるヘイドン・ホワイトは、ホロコーストをめぐる議論の中で、「真実」は言語による語りという行為をつうじて、また語る権威が誰かに付与されることによって生み出されるという。歴史的出来事を解釈する歴史記述において、言語は「特殊なプロット化の様式、説明のモデル、イデオロギー的姿勢」といった修辞形式を強いることによって、複数の「競合する物語」あるいは異なった「真実」を生み出すことになる。(ホワイト 1994) このようにホワイトによれば、「真実」は語りという行為をつうじて、また語る権威が誰かに付与されることによって生み出される。ブルデューが言うように、「写真画像が現実の正確で客観的な複製であるとみなされることになるのは、写真の社会的利用が、写真のもつ様々に可能な利用法の領域の中で、世界に関するありふれた見方を組織する諸範疇にしたがって構造化された選択

を行うゆえなのである。」(ブルデュー 1990:93) このとき他者表象とは、権威を得た書き手が語りを駆使して他者の「真実」の相貌をもって現前させる行為に等しくなり、権力―政治の問題として提示される。(春日 2002:198-199) しかし「歴史的事実」あるいは「出来事」をいったん棚に上げ、言説や表象の政治性へと回収する構築主義的歴史学は逆説的な危険性をはらんでいる。その一つは、多くの先住民は文字を持たなかったために、言語をはじめとする表象行為からあらかじめ排除されているためである。

「表象論的読解は、テキストの表象作用がその一部であったところの過去の表象的実践活動の解明には役立つが、その活動の外部にあったものについては何も語ってくれない。表象的実践活動の外部とは、表象作用の主体ではなく客体としてしかその活動に関わらなかった人々、すなわち無文字社会の人々、あるいは文字社会の非識字層に属する人々のことである。彼らは書くことも読むことも出来なかったため、テキストの生産、流通、消費から原則として排除されていたのである。」(齋藤 2002:105)

また権力―政治の表象へ着目した議論は、過去の「出来事」から離れて、自己の代弁を他者に求めるという関係を生みだしてゆく。それはギデنزが指摘するように、ある出来事についての歴史＝知識を保証するのは、「歴史」とされるものへの信頼でしかないという再帰性に依拠することで、歴史と出来事のあいだの循環的な関係に陥るからである。(ギデنز 1993, 2005)

さらに過去が言説によって構築されるという主張が純化されるとき、具体的な社会状況を生きた人々の過去の生は「言説」や「表象」の内部に暴力的に押し込まれてしまう。その結果、「現在主義」(歴史は現在の視点から遡及的に記述・構築されるとする)は、過去の人々の生を抑圧する暴力に荷担してしまい、「構造主義」や「歴史主義」(抽象的な理論によって遡及的＝演繹的に過去の人々を記述する)によって人々の具体的な生を奪ってきた歴史記述と共犯関係を結ぶことになる。これに対して北田暁大は、自らの歴史記述が過去の事実と照らし合わせて偽りとなる可能性を認識しつつ、現時点で収集可能な史料から一応 (prima facie) 「真」であると考えられる歴史記述を紡ぎだすことが重要だと述べる。(北田 2001) これは、相対主義的に独立した複数の現在によって過去が存在するという構築主義(相対主義)も、抽象的な一つの構造や科学から過去が記述可能(本質主義)とするのも、具体的な場所や身体性などを否定している点では鏡像関係にあるとして、本質主義・構築主義の二元論を避けるための「於いてある知識」(situated knowledge)を主張するダナ・ハラウェイの議論と通底している。その於かれている位置は固定しておらず、所与のものであると同時に構築されたものとして非近代的(amodern)であり、そこには「近代」における自己のように、位置を認識することも、主体的立場をとることも必要としない人々の、欲求や必要が込められている。(HARAWAY 1988) 「客観性とは、限定された場所と場所的な知識に関するものであって、超越的なものでも主体と客体が分離したものとして存在するのでもない。そのような客観性が、何を学びどのように見るかについて回答することを可能にしてくれるのである。」(HARAWAY 1988; 583) つぎに、このような博覧会という場所に「於いてある知識」を、現時点で収集可能な文字史料と、シカゴ・フィールド博物館に残された二つのテクンペという非文字史料をとおして見てゆきたい。

5 二つのテクンペ

シカゴのフィールド博物館には多くのアイヌ民族資料が所蔵されているが、そのなかに鮮やかな色糸を使って特異な刺繍の施された、二つの黒いアイヌのテクンペ(手甲)が含まれている。(写真

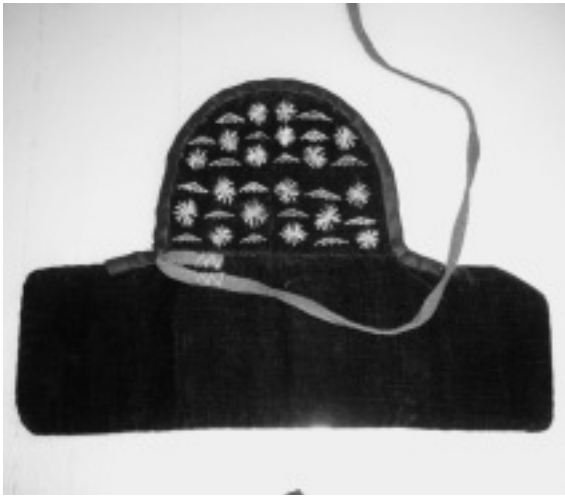


写真1 大沢シラケ氏の作品と考えられる女性用テクンペ。(The Field Museum, Chicago 所蔵 資料番号 88036)



写真2 辺泥五郎氏の作品と考えられる男性用テクンペ。(The Field Museum, Chicago 所蔵 資料番号 88016)

1、2)²⁾ フィールド博物館の資料によれば、1904年に開催されたセントルイス博覧会関係者から、158点のアイヌ資料が1905年1月13日に合計95.30ドルで購入されているが、これらのアイヌ関係資料は、フィールド博物館から博覧会場に派遣された学芸員のシムズ (Steven C. Simms) によって、閉会直後の1904年12月に購入されたものである。そして全ての資料にはその産出地 (locality) として、Yezo Island, Hakodate と書かれている。³⁾ セントルイス博覧会には、9名のアイヌの人々が人類学展示のために参加したことが知られているが函館の出身者はなく、6名が平取、2名が新冠、1名が札幌から参加している。(FRANCIS 1913; 525-526) このため、これまではシムズによって購入されたアイヌ資料の多くは古物商などにより北海道各地で収集され、日本政府によって函館で博覧会展示用に一括購入されたものであると考えられてきた。(VANSTONE 1993; 89, 出利葉 2007) そして、これらの158点の資料の中には、写真の二点を含む合計四点の手袋 (gloves) が含ま

2) 津田命子氏によると、手の保護に使われるアイヌのテクンペ (手甲) は、労働や旅行で用いられ儀礼には使われない。また手の保護用にはこのテクンペの他に、布製や革製のマトゥメレ (手袋) があり、刺繍がほどこされたものがある。(アイヌ文様の美 2006; 195) このことから、実用品であるテクンペには一般的には装飾的な刺繍が少ないと考えられる。また、本来は「テクンペ」と表現すべきであるが、本稿ではフィールド博物館資料の表記にしたがって「テブクロ」という言葉も用いている。

3) 納入日に関しては、Historical File, Accession No.900 による。またこれらのアイヌ資料のフィールド自然史博物館資料番号は 88001~88158 の158点である。

れているが、人々の関心と呼ぶことなく地下の収蔵庫に収められてきた。⁴⁾

ところで、フィールド博物館のアイヌ資料ファイルには、便せんに鉛筆書きの日本語で書かれた、アイヌ男性参加者4名が売却した衣服や装飾品、それに日常品などのリスト4枚が残されている。それらのリストによれば、大沢ヤゾウ (Yazo Osawa) が7点を15.00ドル、辺泥五郎 (Goro Bete) が6点を9.80ドル、サンゲア (Shangea) が18点を27.80ドル、クトログ (Kutoroge) が12点を42.70ドルで売却しているが、このメモには博物館の資料番号は記されていない。これら合計43点の合計金額95.30ドルは、シムズが158点を購入した金額と一致するため、シムズが支払った購入代金の95.30ドルは、これらのアイヌの4名に支払われた43点の代金で、それ以外の収蔵品115点は、日本政府が博覧会展示用に函館で購入したアイヌ資料をシムズが無料で譲り受けたものだと考えられる。⁵⁾ また、これらのアイヌの人々の売却品リストによれば、大沢ヤゾウが「女ノテブクロ」一点を50セントで、辺泥五郎が「男ノテブクロ」一点を50セントで売却している。アイヌ資料の売却者が全て男性であることは、家族のものを家長の男性が代表して売却したと考えられるが、大沢ヤゾウには18歳の妻シラケがセントルイス博覧会に同行していたため、「女ノテブクロ」はシラケのものだと考えられる。また辺泥五郎は单身セントルイスに渡っていたため、「男ノテブクロ」は辺泥五郎自身のものだと考えられる。では、フィールド博物館に所蔵されている4点のテブクロのうち、どのテブクロが辺泥五郎と大沢ヤゾウが売却したものなのだろうか。

フィールド博物館に収められた4点のテブクロは、大きく二つのグループに分けることができる。そのひとつは、大きさの異なる表地の黒い二つのテブクロで、小さな方(資料番号88036)には裏生地に赤の布が使われ、表には金と銀の細かな刺繍が施されている。また大きな方(資料番号88016)には裏生地に茶色の生地が使われ、比較的大きな茶色とピンクの刺繍が施されているが、いずれも使用された痕跡がほとんどなく100年経った現在でも鮮やかな色彩を残し、真新しい紫(資料番号88036)と水色(資料番号88016)の紐がつけられている。そして特筆すべきは、これらの二つの刺繍の紋様が、いずれも二種類の直線的な紋様の繰り返しからなっていることだろう。まず小さな方のテブクロでは、ほぼ同じ大きさの小さな紋様が用いられているが、そこでは山形の紋様が17個、星形の紋様が17個の計34個もの紋様が縦6列に並べられ、2列以降では横に交互に繰り返されている。また大きな方のテブクロでは、同じ大きさのひし形の紋様9個と、大きさの異なるX形の紋様6個の計15個からなり、このテブクロでは同じ紋様が3個ずつ5列に縦方向に交互に並べられている。それらの紋様、配列、ステッチの技術に関しては更なる調査が必要だが、直線的な多数の紋様の配置、絹糸を使ったと思われる鮮やかな色彩などが、ほかのアイヌ工芸とは異なる印象を与えていることは間違いなさだろう。⁶⁾ これら二つの真新しいテブクロに対して、他の二つのテブクロ

4) 158点のアイヌ資料リストの中で、手袋 (Gloves) としては、88016 (Gloves, dark blue cloth)、88017 (Gloves)、88025 (Gloves of cotton print)、88036 (Velvet gloves) の4点が含まれている。

5) アイヌの人々が売却した43点に函館で購入された品物がふくまれず、すべて個人が持ち込んだ「私物」であったかに関しては今後のさらなる調査が必要である。しかし、アイヌの衣服は部分的に共有されることはあっても、「着る人のことを考えて一針、一針、縫っていくもの」といわれることから、その多くは個人のものであった可能性が高いだろう。(出利葉 2007: 38)

6) 今後は明治期を中心にしたアイヌ工芸の資料を調査し、デザインや製作技術について検討を行ってゆきたい。また同様の紋様は、ネイティブ・アメリカンの図案にその類例を見ることができる。(NAYLOR 1975) 細かなデザインの繰り返しからなるこれらの刺繍が、アイヌの伝統的な紋様を踏襲したものであるのか、あるいはセントルイス博覧会に参加していた他の先住民や西洋の紋様を参考にして作られたハイブリッドなものであるかを詳しく検討することと、類例を調査することは、今後の検討課題である。

(資料番号 88017、88025)には表地に刺繍が無く紋様入りの生地が使われ、いずれも使い古されて一部はすり切れ汚れている。また、これらのテブクロに付けられた紐は、一方が黒色(資料番号 80017)、一方が水色(資料番号 80025)である。9名のアイヌの人々は、1904年4月にセントルイスに到着し、同年12月初めにセントルイスを離れているように、その滞在期間中にテブクロを使用するほど気温が下がる時期は短かったと考えられる。(宮武 2006) また、巧みな木彫りで知られるアイヌの盆は、優れた工芸品として明治10年の内国勸業博覧会のために特別に制作されたことが知られているが、セントルイス博覧会の1904年頃には未だ、アイヌのテクンペのような生活用具が日本国内で工芸品や土産物として作られ、未使用のまま売られることはなかったと考えられる。(大石 1994、北原 2003) その一方で、セントルイス博覧会場でアイヌの人々は、木彫りのスプーンや袋類、装飾を施したクッションなどの工芸品を制作し、見学者に販売していたことが知られている。(バチラー 1993) これらのことから、刺繍のない使い古されたテブクロ二点は、古物商などが収集し博覧会のために函館で日本政府が一括して購入した使用済みのものであり、美しい刺繍の施された二つの真新しいテクンペは、大沢シラケ(資料番号 88036)と辺泥五郎(資料番号 88016)の二人によって、博覧会場で様々なデザインを刺繍に取り入れて制作されたものが、ほとんど使用されないまま、閉会直後にフィールド博物館のシムズに売却されたと考えられる。⁷⁾

先に述べたように、さまざまな先住民を「文明社会」の中心都市に運び「展示」した二十世紀初頭の博覧会は、産業資本主義と植民地支配を祝う帝国の祝祭であったと同時に、異質の歴史や社会や文化を持った人々の、直接の相互交流が繰り広げられた接触領域(contact zone)でもあった。(CLIFFORD 1997) そこではアイヌの人々が様々な実践を行い、様々な要素が境界を越えて移動し、混淆し、新たな価値が生み出されていたといえるだろう。シカゴ・フィールド博物館に収蔵されたこれら二つのテクンペは、紋様のすばらしさや、製作年と製作場所が特定できるという点で重要なだけでなく、辺泥五郎と大沢シラケという二人のアイヌの人々が博覧会での日常的実践の中から生み出した点で、貴重な作品であるといえるだろう。

6 おわりに

2007年8月、筆者はセントルイス博覧会参加者の親族のなかで唯一の語り手である近森聖美氏とともに、祖父の辺泥五郎氏を含めたアイヌ参加者の資料を求めてニューヨーク、セントルイス、シカゴを訪れた。この旅は100年以上前に、アイヌの人々が展示されたセントルイス博覧会の会場や資料を、アイヌの視点から再度見ることによって、これまで理解できなかった博覧会におけるアイヌの人々の姿が見えてくるのでは、という期待から実現したものだった。⁸⁾ ニューヨークでは、セントルイス博覧会の女性専属写真家であった、ビールズの撮影した写真資料が多く保管されている自然史博物館で、セントルイス博のアイヌ写真とともに、二点の博覧会資料を含むアイヌ衣装のコレ

7) 読者は男性の辺泥五郎氏が刺繍を施したテクンペを制作することを疑問に思うかもしれない。しかし、孫娘の近森聖美氏によれば、祖父は編み物が得意で「バチラーさんから貰った椅子に座って縁側でよく編み物をしていた」という。辺泥五郎氏の編み物がセントルイスで米国婦人に教えられたように、辺泥五郎氏は既成のジェンダー観に規定された男女の技術領域に囚われず、さまざまな技術をセントルイスで習得していたと考えられるだろう。(宮武 2006; 80)

8) この近森氏による米国におけるセントルイス博覧会関係の調査旅行については、北海道新聞で「セントルイスの9人・アイヌ民族の明治」と題して紹介された。(2007年9月17日～9月30日)

クションを見ることが出来た。さらに筆者は、セントルイス博覧会の人類学部門書簡ファイル (St. Louis Fair correspondence, Division of Anthropology Archives) に含まれていた、当時自然史博物館に所属していたフランツ・ボアズからセントルイス博覧会人類学部門のマクギーに宛てた1904年3月5日付けの書簡を発見した。(Box 15, Folder 2) それによれば、自然史博物館の彫刻家メイヤー (Caspar Mayer) によって新たに開発された技術で、セントルイス博覧会の人類学展示参加者の胸像 (life cast) が作成される予定だという。また10月に送られた制作者のメイヤーからボアズへの手紙によると、55体作成されたなかで15体がシカゴのフィールド博物館に売却され、残りの40体がニューヨークのアメリカ自然史博物館に納入されている。⁹⁾ さらに資料を調査すると、それぞれの胸像がどの参加者であるか、そのすべての名前を記入したリストを探し出すことが出来た。その中には3体のアイヌの胸像が含まれていることが判明したが、しかもその一体は辺泥五郎氏 (Coro Pete) のものであった。ニューヨークからセントルイスへ出発する前日、自然史博物館は倉庫から奇跡的に3体のアイヌの胸像を見つけ出し、収蔵庫の一室で近森氏と筆者に見せてくれた。これらの胸像はセントルイス博覧会以来、ほとんど誰の目にも触れず倉庫に眠っていたものだが、(写真3)は100年以上隔ててニューヨークの自然史博物館で対面することになった辺泥五郎氏と孫娘の近森聖美氏である。

また、前節で紹介した二つのテブクロもまた、近森氏とシカゴのフィールド博物館地下の収蔵庫で、アイヌ関係の資料を確認している際に「発見」したものだ。これらの資料は展示されずフィールド博物館地下の収蔵庫で、他の多くのアイヌ資料とともに収蔵されていたが、これまでも多くのアイヌ研究者の目に触れてきたはずである。しかし筆者を含め誰ひとり、これらのテブクロの特異な刺繍に気づくことはなかった。それは、和人研究者にとってはアイヌであれアメリカ・インディアンであれ、同じ「他者」である先住民の文様に映ったからだろう。しかし近森氏にとっては、二つのテブクロの紋様は一般的なアイヌの工芸には見られない特異な「他者」の紋様と映ったようである。近森氏はテブクロを見ると直ぐ「このテクンベおかしいですよ」と語っている。このような筆者と近森氏の認識のズレが、筆者に二つのテブクロの由来を調査する契機を与えることになった。それは既存の知識から対象を理解しようとする仮説検証型のアプローチから、それらのテクンベの



写真3 約100年ぶりにニューヨークで再会した辺泥五郎氏の胸像と孫娘の近森聖美氏。
(2007年8月 American Museum of Natural History)

9) 当時の「科学」は非西洋世界の人々を一方向的に記録し計測の対象としてきた。写真が二次元で先住民の姿を記録しようとしたのに対し、これらの胸像は三次元的に先住民の姿を記録しようという、当時の「科学」的意図により製作されたことを指摘しておきたい。

由来やデザインを探るという仮説生成型のアプローチへの転換だったといえるだろう。いいかえれば、さまざまな仮説をいだいて対象を認識し検証していた研究者に対して、博物館というフィールドで近森氏が指摘した二つのテククロの特異性は新たな問を突きつけ、その作られた由来と製作された特異な紋様についての検証へと導いていった。そして筆者は2007年9月に再度シカゴを訪問した際に、フィールド博物館のアイヌ関係資料の中から、アイヌの人々が売却した品物の手書きのメモを発見することが出来た。それによって、近森氏が一瞥してその特異性を見抜いたアイヌのテクンペの一つは、その祖父が約100年前の博覧会場で創造力を発揮して生み出した、ハイブリッドな作品である事が判明したのだ。

これら二つの非文字史料としてのテクンペは、本稿で先に述べた写真史料と同じように、固定化した視点や、超越的な視点からは決して発見されることのなかったものだろう。なぜならそれは、アイヌのものであると同時にアイヌ以外のヒトやモノとの接触において生み出されたものであり、固定したまなざしの対象としては定義不可能だからである。また、超越的な視点からは、先住民が生きた具体的な日常的活動や、そこで生まれた創造的な実践の側面が失われてしまうからである。セントルイス博覧会は、多くのアイヌの人々にとって、さまざまな西欧人や和人、あるいは各地の先住民とはじめての接触と交流の場であった。そのような博覧会展示の時空間では、人々はさまざまな制度や権力関係として現れる構造に規定される一方で、多様な要素がもつれ合い (entangled)、さまざまな日常的実践を通して、従来の価値や認識を塗り替えるような多様な出来事に出会い、ハイブリッドな生成物を生み出していたといえるだろう。(THOMAS 1991)本稿はそのようなアイヌの人々の「歴史」を、二つのテクンペという非文字史料を通して、超越論でも還元論でもない「於いてある知識」として捉えるためのひとつの試みである。

この研究の一部は、科学研究費補助金(基盤研究(B))「アジアにおける博覧会の研究」(研究代表者 宮武公夫)および、科学研究費補助金(基盤研究(B))「明治期における西洋近代とアイヌ民族の出会いに関する文化人類学的研究」(研究代表者 出利葉浩司)の助成を受けて行われたものである。また近森聖美氏には米国調査をはじめ、多大の協力をいただいたことを感謝したい。

参考文献

伊藤真美子

2003 「1904年セントルイス万国博覧会と日露戦時外交」『史学雑誌』第112 号 第9号、pp.66-86

大石 勇

1994 『伝統工芸の創生——北海道八雲町の『熊彫』と徳川義親——』吉川弘文館

春日 直樹

2002 「物語ること」森明子編『歴史叙述の現在——歴史学と人類学の対話』pp.196-220 人文書院

春日 直樹

2004 「いまなぜ歴史か——序にかえて」『文化人類学』69-3、pp.373-385

川田 順造

2001 『無文字社会の歴史』岩波書店

ギデンズ、アンソニー

1993 松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か? モダニティの帰結』而立書房

ギデンズ、アンソニー

2005 秋吉美都他訳『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』ハーベスト

- 社
北田 暁大
2001 「歴史の政治学」吉見俊哉編『カルチュラル・スタディーズ』pp.173-210 講談社選書メチエ
北原次郎太
2003 「『旧拓殖館資料』の観察所見」『旧拓殖館所蔵民族資料コレクション資料目録』北海道開拓記念館
一括資料目録 第37集 pp.118-128
斉藤 晃
2002 「歴史、テキスト、プリコラージュ——一七・一八世紀のイエズス会宣教師の記録を読む——」森
明子編『歴史叙述の現在——歴史学と人類学の対話』pp.100-128 人文書院
田辺 繁治
2002 「日常実践のエスノグラフィー語り・コミュニティ・アイデンティティ」田辺繁治／松田素二
編『日常実践のエスノグラフィ』pp.1-37、世界思想社
田辺 繁治
2003 『生き方の人類学』講談社現代新書
出利葉浩司
2007 「セントルイス博覧会で『展示』されたアイヌ衣服について」『北海道開拓記念館研究紀要』第35
号 25-42 頁
バーク、ピーター
2007 緒川春樹訳『時代の目撃者』中央公論美術出版
バチュー、ジョン
1965 仁多見巖訳『ジョン・バチューの手紙』山本書店
バチラー、ジョン
1928 『ジョン・バチラー自叙伝』文禄社
バチラー、ジョン
1993 仁多見巖・飯田洋右訳『わが人生の軌跡』北海道出版企画センター
バチラー、ジョン
1995 安田一郎訳『アイヌの伝承と民俗』青土社
北海道立近代美術館、アイヌ文化振興・研究推進機構
2006 『アイヌ文様の美——線のいのち、息づくかたち』アイヌ文化振興・研究推進機構
ブルデュー、ピエール
1990 山縣直子訳『写真論』法政大学出版局
ホワイト、ヘイドン
1994 上村忠男訳「歴史のプロット化と真実の問題」『アウシュビッツと表象の限界』pp.57-89 未来社
宮武 公夫
2000 『テクノロジーの人類学』岩波書店
宮武 公夫
2002 「人類学とオリンピック——アイヌと1904年セントルイスオリンピック大会」『北海道大学文学研
究科紀要』108、pp.1-22
宮武 公夫
2006 「博覧会の記憶——1904年セントルイス博覧会とアイヌ——」『北海道大学文学研究科紀要』118、
pp.45-93
吉見 俊哉
1992 『博覧会の政治学——まなざしの近代』中公新書

ライト前川眞二郎

2003 『ライト前川眞二郎著作集 日誌（昭和16年～23年）』 フランシス佐藤眞

BREITBART, Eric

1997 *A World on Display: Photographs From the St. Louis World's Fair 1904* University of New Mexico Press

CLIFFORD, James

1997 *Routes; Travel and Translation in the Late Twentieth Century*, Harvard University Press

COHN, B.S.

1987 *An Anthropologist among Historians and Other Essays* Oxford University Press

EDWARDS, Elizabeth ed.

1992 *Anthropology & Photography* Yale University Press

FERMIN, Jose D.

2004 *1904 World's Fair; The Philippino Experience* The University of Philippines Press

FRANCIS, David R.

1913 *The Universal Exposition of 1904*, Louisiana Purchase Exposition Co.

GEERTZ, Clifford

1973 *The Interpretation of Cultures*, Basic Books

HARAWAY, Donna

1988 Situated Knowledges; the Science Question in Feminism and the Privilege of Partial Perspective, *Feminist Studies* 14, no.3 (Fall 1988) pp.575-599

HARRIS, Neil

1975 "All the World a Melting Pot? Japan at American Fairs, 1876-1904", IRIE A. ed., *Mutual Images; Essays in American Japanese Relations* Harvard University Press

HOTTA-LISTER, Ayako

1999 *The Japan-British Exhibition of 1910; Gateway to the Island Empire of the East* Japan Library

LATOUR, Bruno

1993 *We Have Never Been Modern* Harvard University Press

NAYLOR, Maria ed.

1975 *Authentic Indian Designs; 2500 Illustrations from Reports of the Bureau of American Ethnology* Dover Publications

PAREZO, Nancy J. & FOWLER, Don D.

2007 *Anthropology Goes to the Fair* University of Nebraska Press

RABINOW, Paul and SULLIVAN, W. M.

1979 *Interpretive Social Science*, University of California Press

RYDELL, R.W.

1984 *All the World's a Fair; Visions of Empire at American International Expositions, 1876-1916* University of Chicago Press

RYDELL, R.W.

1992 *The Book of the Fairs; Materials about World's Fairs, 1834-1916* American Library Association

SHATZKI, T.R., KNORR CETINA, K. & SAVIGNY, E.V., eds.

2001 *The Practice Turn in Contemporary Theory* Routledge

STARR, Frederick

1904 *The Ainu Group at the Saint Louis Exposition* The Open Court Publishing Company, Chicago

TAKADA, Hiroko

1992 *Images of a Modern Nation; Meiji Japan and The Expositions, 1903-1904*, Senior Seminar Paper, publisher unknown (Missouri Historical society Library)

THOMAS, Nicholas

1991 *Entangled Objects; Exchange, Material Culture, and Colonialism in the Pacific* Harvard University Press

VANSTONE, J. W.

1993 The Ainu Group at the Louisiana Purchase Exposition, 1904 *Arctic Anthropology* Vol.30, No. 2, pp.77-91

Ainu Artifacts in The Field Museum, Chicago: Two Tekunpe and 1904 St. Louis World's Fair

Kimio MIYATAKE

Graduate School of Letters, Hokkaido University

More than a century ago, nine Ainu people visited St. Louis from Hokkaido for Anthropology display in 1904 World's Fair and lived in two Ainu homes, Chise, for seven months. The anthropology display has been criticized for the ideological and political problems and the natives who visited St. Louis have long been regarded as victims of colonialism. As many researches, it is true that the anthropology display focused on the backwardness or singularity of native people, but the Ainu people were not mere victims who were displayed like things but active agents who engaged in practice, crossed boundaries of nation or ethnicity, and revised concepts and created hybrid artifacts.

This paper first examines the possibility of using non literal artifacts for the historical research of native people, who were non literate or very little literal archives are left. As Japanese anthropologist Junzo Kawada says, artifact as historical record is situated between literal archive and verbal narrative and there is no essential difference among them. Showing the possibility of artifacts, photographs or other things, as historical resource of native people, this paper then examines the authenticity/constructed debates in social science study and the problems of both approaches in the history study, and proposes to situate the artifacts in the locus to be studied.

In the latter part of this paper, two beautifully embroidered Ainu gloves, Tekunpe, in The Field Museum, is introduced and author shows from original slips and other records in the museum that the two gloves, one for male and the other for female, among 158 Ainu artifacts purchased from 1904 St. Louis World's Fair, were sold and possibly made by two Ainu people in the 1904 World's Fair.

Author's research trip to USA in 2007 with Ms. Chikamori, the only narrator among the descendants of nine Ainu people, enabled us discover the two Tekunpe. She showed surprise at a glance when she saw the two gloves among many Ainu artifacts in the warehouse of The Field Museum, where the difference was obvious for her but not for me, as many anthropologists, not natives. Later author's research, initiated by her surprise, revealed one of the two Tekunpe was sold by her grandfather, Goro Pete (Bete). Although further research is necessary for the detail of the design, skill or the material, they are obviously very rare hybrid artifacts, entangled object, possibly made by Ainu people in 1904, in far remote place of St. Louis World's Fair, working among many other natives, Americans and Wajin, Japanese. This paper is a part of author's research of early Ainu history situated in the locus, between past and present, and human and non human artifacts.